姉属性専門誌

全姉連会報

6

初めましての方も、おなじみのかたもこんにちは。
この度は全姉連会報をお手にとっていただき、ありがとうございます。
「全姉連会報第6号」発行に至りました。

＊

全姉連のご紹介を。

全姉連は「お姉さん」の魅力を世界に広め、推進していく非政府組織(NGO)です。
姉属性の普及、弟同志の情報交換を主に行っています。
全姉連総本部は普段Webサイト上で主に活動していますが、
C65よりコミケへ進出しました。

本書は、私・全姉連総裁が実際に触れて体験した
姉ゲー・姉コミックなどについてレポートするものです。
良い姉作品には惜しみない賛辞を、
不満足の姉作品には容赦ない指摘を加えます。

＊

妙に「双子」が目についた今期のお姉ちゃん作品の数々。
それならばと特集を組んでみました。1冊まるまる双子づくしです。
姉御肌の姉貴にいじられたり、甘く優しいお姉ちゃんに癒されたりが
一度に楽しめる双子お姉ちゃん。
しかし、双子姉のジャンルはほとんど未開拓なのが現状です。
歳の違う姉妹ではなく、双子お姉ちゃんでしかなしえない
姉萌えの新たな境地は見つかるのか？
姉属性の世界は、まだまだ奥深いようです。

＊

それでは、本書が迷える弟のよりよい姉ライフの一助となることを祈って。

【全姉連会報 第６号】

「一人」より「双子」で行こう！

双子お姉ちゃん特集

貴弟は気付いていたか？
今年は「双子お姉ちゃん」の当たり年であったことを！
時には双子ならではの息の合った弟可愛がりが！
時には双子ゆえの対抗心から生まれる弟争奪戦が！
双子姉の世界では、１＋１＝∞。
お姉ちゃん、ボク、体一つじゃもたないよぅ……

今号もフルカラー表紙

＋

ゲスト原稿も！

ご覧の通り、今号もフルカラー表紙でお送りします。
絵師は全ママ連の主宰としても大活躍中のキョルノフさん。
彼の住む国では「ぱんつ」を履く習慣がないらしいです。
だから、表紙の絵に関して彼を責めないであげてください。

そして、ゲスト原稿として、我林さんから姉ライトノベルのレビューをいただいています。対象作は『影≒光（シャドウ・ライト）』。
双子の姉弟について鋭く切り込んでもらいました。

さらに、前回大好評の表紙絵を描いていただいた千里きりんさんから、またもありがたいゲストページを頂戴しております。
発売前から話題になっている、あのゲームからです！

では、全姉連会報 第６号、ごゆっくりとお楽しみください。

彼女たちの流儀

メーカー	130cm
ジャンル	青春群像 AVG
発売日	2006 年 6 月 23 日

主人公、兎月胡太郎はすましていれば深窓のお嬢様で通るような可憐な美少年。両親の離婚以来、家を出た母と 2 人で暮らしてきたが、母の急死によって実家に帰る事になった。

5 年ぶりに実家の敷居をまたいだ胡太郎は、双子の姉たち、鳥羽莉と朱音に再会する。再会を喜ぼうとした胡太郎だったが、下の姉・鳥羽莉の態度はあまりに冷たかった。

それから半年———。姉たちの通う学園に転校した胡太郎は、クラスメイトになった幼なじみや変わった友人、病気のため留年しているもうひとりの姉・朱音らに囲まれ騒がしくも愉快な学生生活を送っていた。

しかし、鳥羽莉だけは胡太郎に笑顔を見せることはなかった。初めは打ち解けようとした胡太郎だったが、つれなくあしらわれて挫折しそうになる。もう、鳥羽莉が自分を見てくれる事はないのだと思っていた。

———その夜までは。

■双子のお姉ちゃんは…吸血鬼

タイトル名や「青春群像 AVG」のジャンル名、パッケージイラストからは一見想像が付きませんが、ここの双子のお姉ちゃん、姿形は可愛い女の子でも吸血鬼。何も知らずに見たら妹ヒロインや年下ヒロインに思えてしまっても、立派なお姉ちゃん吸血鬼！なのです。

吸血鬼とは言っても、夜な夜な人を襲う恐怖のモンスターでもなければ、逆にこの手の PC ゲームにありがちな、脳天気お気楽バンパイア…みたいな代物でもないのですが。外見はちょっと幼く見えても、おおむね普通の双子お姉ちゃん。そんなお姉ちゃん二人の住むお屋敷へ、弟主人公が 5 年ぶりに帰ってくる所から話は始まります。

■5 年ぶりに再会した双子姉

訳あって別居していた主人公が、双子の姉二人（と家令兼メイドさん一人）の住む家に帰り、5 年ぶりの再会を果たします。

5 年ぶりの再会、しかも小さい頃は仲良しだった姉弟の再会となれば、「○○クン、おかえり～！」と飛びついてくれたり、「よく帰ってきたわね」と、照れ隠し見え見えで迎えてくれる姉がいそうなもの。しかしそこには、階上から無表情に見下ろしてくるだけの一人の姉と、「ふふふ…」と静かな愛想を振りまくだけのもう一人の姉が。

微笑んでくれた姉は、上の姉の朱音（あかね）おねーちゃんで、こちらは取っ付きやすいタイプの姉ですが、つれない態度の、下の姉・鳥羽莉（とばり）お姉ちゃんは心に厚い壁を作っていて、何を考えているのか今ひとつ分からない…、そんな双子姉コンビなのです。

■学園が主な舞台の青春群像

主人公とその姉 2 人の通う学校の文化祭を二十日後に控えた時期。演劇部の部長である鳥羽莉お姉ちゃんが、主人公を文化祭で公演する演劇のヒロイン役に引き込み、日々の練習と共に織りなす青春群像、が本作の大筋です。

主人公がヒロイン役、というのは言い間違いではなく、その容姿が可憐な女の子に見間違うほどだから[1]。姉ゲーにはホント多いですよね、か弱い美少年の弟主人公が。筆者が今度生まれ変わるとしたら、「お姉さんのいる、“可愛くて華奢な”弟」と付け加えようと思います。

それはさておき、登場するヒロインは、双子のお姉ちゃん２人だけではなく、幼馴染みで突っ込み役の眼鏡委員長、元気で一途なボクっ娘の後輩、主人公を毛嫌いして容赦なくかみついてくる後輩、有能で勇壮で凛としたメイドさん。非攻略対象のサブヒロイン数名と、一癖ある男友達が登場します。

正ヒロインはもちろん双子の姉２人。本作の中心が吸血鬼の双子姉と弟なので、これは当然。では、本作の姉ゲー度はどうかと言えば、合格点は十分付けられます。鳥羽莉姉・朱音姉シナリオとも、血の繋がった姉弟であることが前提になっていますし、良いタイミングで「姉と弟」を意識させるセリフが挿入されています。ただ、物語のテーマが別にあるため、姉弟愛「だけ」を追い求めて描かれたシナリオではありません。(姉２人はどちらも弟が大好きなのは間違いありませんが) 純粋に姉弟愛を中心に追う姉ゲーに比べれば一段格下にはなってしまいますが、それでも姉ゲーと呼べる作品でしょう。

ところで。一大イベントである文化祭の準備や合宿に追われる中で、個性豊かなヒロイン達とのぶつかり合い。時にはドタバタ、時にはシリアスに…。本作を読み進めていると、あの姉ゲーの名作『秋桜の空に』『お姉ちゃんの３乗』(いずれも Marron 作品)の記憶とよく重なりました。もっとも、その２作品と比べると、姉のダダ甘度はかなり低めなのですが、雰囲気は大変似たものを感じます。もしも『秋桜』『３乗』のノリが懐かしく思える弟さんならば、この点は大いにプラスでしょう。

なお、原画はみやま零さん。『ドラマ CD お姉ちゃんの３乗』のジャケットイラストをお描きになった方です。先生の絵のファンであれば、これは間違いなく買い。全面的にみやま色に染められていますから[2]。

■キャラクター

・白銀鳥羽莉（双子の下の姉）

主人公の１歳年上で、学園の３年生。演劇部の部長。非常に才能豊かで、金色の美しい髪が似合う、高貴で上品かつ知的な印象のお姉ちゃん。

しかしながら鳥羽莉姉、常に冷静で表にほとんど感情を表さない、滅多に笑顔を見せてくれない姉なのです。余計なことを語らず、精神的な殻の固い姉。かといって弟のことを嫌っているわけではないので、ツンデレでもありません。筆者はプレイ中、彼女のことをずっとローゼンメイデンの真紅の擬人化だとばかり感じていました。同じくプレイした人なら、きっとうんうんと頷いてくれるはず。

小さい頃はもっと仲が良かった姉弟だったのに、離れていた５年の間に変わってしまったようにみえる理由。大好きなはずの弟と積極的に関わろうとしないのは彼女の性格からなのか、あるいは。

彼女は双子の下の姉ですが、実は上の朱音姉よりもしっかりしていて、物語的にも中心に位置するヒロイン。何故そういえるのかはネタバレにつながるのでここでは省略します。

[1] そういう男の子なので、女装するシーンももちろんあります。

[2] ビジュアルファンブックも発行されています。

・白銀朱音（双子の上の姉）

聡明な完璧タイプの鳥羽莉姉と対照的に、朱音姉は天真爛漫で無邪気なおねーちゃんタイプ。生まれつき体が弱かったため１年休学した結果、主人公と同じ学年で同じクラス。しゃべり方（声優の演技も含めて）が舌足らずで、幼さが強調されています。ロリ姉もお好みの姉属性なら貴重な存在。

「姉御肌」「母性的」といった言葉とはおよそ無縁なおねーちゃんなのですが、姉らしい迫り方をしてきたり、「お姉ちゃんの下着に興味アリアリ？」とからかってきたりと、実は油断ならない姉。変に無理してお姉ちゃん風を吹かせるような野暮なことはせず、自然と姉らしさを見せてくれます。

・弓曳火乃香（家令兼メイドさん）

白銀家に住み込む有能なメイドさん。双子の姉に足りない「姉御肌」を代わりに引き受けたかのような存在。上品さを保ちつつ凛として、とにかく「カッコいい」お姉さんメイドなのであります。でかいバイクで学校まで颯爽とお弁当を届けてくれるメイドは伊達じゃない。

また、見かけが幼めの双子姉には求めがたい視覚的姉要素…ぶっちゃけ肉体的姉要素も火乃香さんが補充。背が高くてスタイルの良いお姉さんなのです。

しかし、カッコいいだけではない意外な一面もあるので…それはお楽しみに。

・花葉千佐都（幼なじみ委員長）

個性溢れる同級生の行動に振り回され、苦労するクラス委員長。根は明るく、面倒見の良いツッコミ役。腐れ縁的幼なじみ。

主人公とは一緒にバカが出来る、気楽な仲…だが、内心では主人公を想い続けている、恋する女の子。

そんな委員長キャラといえば、お約束のように眼鏡で巨乳なのでした。

・由希せせり（主人公一途な後輩）

突如主人公の前に現れ、「好きです！」と告白し、あえなく振られるも、「それでもボク、先輩のこと、大好きですから！」とめげることのない、まっすぐな性格の後輩。何事にも一生懸命で、裏表のない素直な性格を持ちつつ、他人の気持ちを汲むこともできる子。「まとわりついてきて鬱陶しい下級生」が苦手な貴弟でも、彼女ならば苦にはならないはず。

・秋名涼月（主人公毛嫌い後輩）

ちょっとしたきっかけで、先輩である主人公のことを毛嫌いし、主人公のことを名字の兎月から取って「ウサギ！」と呼びつけ、容赦ない言葉を浴びせてくる、典型的なツンデレ型。彼女の場合は、本当に嫌っているツンから始まるので、その点は甘っちょろくありません。

■分かり易い姉ゲーでなくとも

本作は、おっとり甘甘な姉に甘やかされたり、姉貴系にいじられまくるような、分かりやすい姉ゲーではありません。何の説明もなしにイラストを見て、姉だと見破ることは土台無理な、幼いキャラクターデザインからしてもそう。

従って、直球ストレートな姉ゲーが好みなら、本作は見送ってしまっても構いません。一方、「姉」や「姉弟」の文字だけでなく、行間を読んで登場人物の気持ちを推し量るような読み方ができるならば、筆者が感じた以上に姉ゲーとしての評価が高くなると思われます。

姉ゲーの中では薄味の方に分類されるでしょうが、その位の方が心地よく感じる弟諸氏もいるでしょう。イラストから受ける印象と合わせて、自分好みだと思えたら、素直に手を出してみて良い作品です。

ふたご姉 ～姉×２とのエッチな関係～

メーカー	BLACK PACKAGE
ジャンル	ダブルシスターエロ ADV
発売日	2006 年 10 月 13 日

主人公は、間違って男子校に入学してしまったという以外は至って普通の学生。

甘いラブロマンスはおろか、ほのかなトキメキさえもほど遠い学生生活を過ごしていた主人公の唯一の希望は、夏休みを海の家での住み込みバイトとして過ごし、水着ギャルに囲まれて過ごす事。

しかし…休みの第一日目、これからバイトへ向かおうとウキウキ気分で一歩を踏み出したその時、猛スピードのママチャリと激突！主人公は足を捻挫してしまう。

『たかが捻挫だよ。たいしたことは無いよ』という主人公を、やや過保護気味な姉×2、撫子とかすみが引き留める。

そうして、そんなやりとりを微笑ましく見ていた両親は『姉さん達がいれば問題ない』と告げ、怪我をした息子の心配もせずに『真珠婚式よ～』と、さっさと温泉旅行へと出かけてしまった。

主人公は暫しの間、姉二人と一緒に一日を過ごす事になるのだが……。

■双子姉+未亡人オンリー

今年は双子姉の当たり年か？と決定的に印象づけられた姉ゲーが本作『ふたご姉』。

主人公は、優しくて過保護気味な姉と、がさつで根がいじめっ娘な姉の双子持ち。そんなうらやましい双子姉に加え、ご近所の未亡人がアクセント的に登場し、ヒロインはこの３人のみの割り切った構成です。

ストーリーは、ある夏休みのこと、主人公が軽い交通事故で足を怪我してしまい、折しも両親が旅行に出かけて、自宅には双子の姉と主人公が留守番に。そこで繰り広げられる「姉×２とのエッチな関係」…となっています。

設定や展開は至ってオーソドックス。シナリオを楽しむ方向の作品というよりは、お姉ちゃん２人との家庭内コミュニケーション（もちろんエッチ方面を含む）に重点が置かれていると言っていいでしょう。

■お姉ちゃんのこと、…好き？

さて、冒頭のストーリー紹介の引用を読めばお分かりの通り、こちらの主人公、水着ギャルとの出会いを求める下心を持って海の家のバイトへ行こうとしたまさにその瞬間、交通事故に遭います。

これが天誅といわずして何と言おうか！

魅力的な双子の姉を差し置いて、夏の海に出会いを求める主人公の不健全な行いは、姉属性の一人として顔をしかめずにはいられません。冗談はさておいても、同居する双子の姉がメインヒロインのゲームなら、購買層は当然我々のようなシスコン軍が中心になるものを、姉二人を置き去りにしてナンパに出ようとする設定は、掴みとして興ざめと言われても仕方ないでしょう。例えば、「本当は行きたくないのに行かざるを得ない状況→弟の照れ隠しと強がりで威勢良く出発→怪我で思わず嬉しい逆戻り…」と、筆者のような素人でも思いつく設定にすれば十分だと思うんですけどねぇ。

その後の態度も、お姉ちゃん達に対してはあまり熱がない様子。本作は間違いなく姉ゲー指向なんだから、初期状態から姉ラブ度が高くていいのに！

■お姉ちゃんはちゃんと弟好き

一方、双子のお姉ちゃんの方はきちんとブラコンしてます。これは救い。

直接的に弟ラヴが表現されているのは、過保護気味で優しい、双子の上の姉の撫子お姉ちゃん。天然気味、箱入り娘的なのに耳年増なため、勘違い混じりのお世話で甘やかしてくれます。

もう一人の姉、かすみお姉ちゃんはがさつでいじめっ娘肌の姉のため、姉萌え初心者には若干難易度の高い姉かも知れません。

二人それぞれのやり方で主人公の弟に構ってきてくれますが、ベタな路線ながらも筆者好みのセリフ・行為が豊富。姉属性の琴線に触れるものばかりで、姉萌えのツボを心得た、大変良い仕事をしています。

ただ、ごく一部、それは姉ゲーの文法的にどうか？と思わされるセリフもあって、出来にムラがあるのも事実。しかし、全体的には良い線行ってると評価して良いでしょう。背徳的な雰囲気はゼロに近いです。

さて、二人のお姉ちゃんが双子である点についてですが、ストーリー上は今ひとつ活用されていなかったように思われます。性格は正反対でも、妙なところで息が合っていたりとか、互いの気心が心の底から知れていて、それがブラコン要素と絡み合えば、あえて双子にする理由も生まれるのですが。確かに難しいかも知れませんが、それがちゃんと出来ている双子姉作品もあるので、何とかして欲しかった所です。

■13 級っぽさを感じる作風

姉要素以外の質については、可もなく不可もなくと言ったところ。昨今の洗練されたインターフェイスに慣れていると、古さを感じてしまうのは否めません。絵も少々クセはあります。

H シーン数は、1 ヒロインあたりにすれば平均的。但し、攻略対象が 3 人だけのため、合計では不足気味か。興味のない年下が居ないだけ、密度が濃いとも言えますが。

そして、内容的にはまだまだ改善の余地がある出来具合。好みの問題になってしまうことを前提に言いますが、普段は姉に逆らえず従順だったりするのに、いざコトに及ぶと調子に乗って身分を忘れるような弟はシスコン失格です。姉弟愛を確かめる大事な場面で姉弟関係をないがしろにしてしまっては全て台無し。姉はブラコン、弟は最後までシスコンであるべき姉ゲーですよ？H シーンで何が大事なのか、ちょっと考えれば分かることなのに。

■キャラクター

・沢渡撫子（双子の上の姉）

温厚でおっとり型の優しいお姉さん。面倒見が良く、とりわけ可愛い弟に関しては過保護な一面を持つ姉です。

職業は家事手伝い…ということで、用事がなければほぼ終日自宅に居てくれます。主人公が夏休み中であることと重なって、とにかく弟の世話を焼いてくれる姉。もちろん過剰なまでに。

> 撫子「あん、運動なんて絶対に駄目！怪我が治るまで、お姉ちゃん権限で禁止しますっ！」

また、この撫子お姉ちゃんは女子校育ちで、弟以外の男をほとんど知らず、それにブラコンが重なって弟離れができず、彼氏の一人もできません。もちろん我々弟的には大変好都合なのですが。その結果、異性に関する知識は疎く、持っている知識も思い込みや誤解でどこかずれているのが特徴。主人公がパソコンで 18 禁ゲーム（しかも姉ゲー）でひとり盛り上がっている場面に偶然遭遇すると…

「まさか、自分の弟が犯罪者になりかけているなんて……」
「うっく、えうぅぅ……可愛い弟が性犯罪で全国ニュースになっちゃうなんて、お姉ちゃん絶対に嫌よぉ……」

のように、弟は既に性犯罪者の扱い。しかし、そこは弟思いの撫子お姉ちゃん。これは弟の欲求不満が原因であると見抜くも、間違った方向にブラコン思考回路がはたらき、二次元ではなく三次元の女性に興味を持ってもらおうと、身を挺して…（略）。

以上のように、おっとり優しい弟思いの性格で、時折見せる行き過ぎたブラコン行動が魅力の撫子お姉ちゃん。妹であるかすみお姉ちゃんに対しても姉らしく振る舞う場面があり、そちらも必見です。

・沢渡かすみ（双子の下の姉）

内向的な撫子姉と対照的に、活発で開放的な性格の姉。がさつで姉貴肌の持ち主です。主人公に対しては、手頃なおもちゃ的な扱いでからかってくることが多い。

公式設定を引用すると

弟思いで優しいところは姉の撫子と同じ。しかし、その愛情表現は『好きな子はついいじめてしまう小学生』的であり、姉である事、年上である事を盾にことある毎に主人公をいじめ抜いて楽しんでいる。

とあるのですが、特に目新しいことを言っているわけではないものの、姉貴系の姉の本質をズバリ突く説明。この情趣を理解できるかどうかで、（姉貴系の）姉属性かどうかが決まると断言できます。

かすみ姉は、そういった弟からかい・弟いじり好きの困った姉であると同時に、ちゃんと弟を可愛く思っている一面も見せてくれます。かすみ姉のセリフを交互に並べてみると、その良さが引き立つでしょうか。

「こんなんで壊れるヤワな弟に育てた覚えはないわ」
「……アンタみたいなのでも、たったひとりの大事な弟なんだからさ」
「ふんっ……ま、結婚どうこうは関係なしに、アンタは一生アタシの奴隷としてこき使ってやるんだけどね」
「あ、アンタは本っ当に馬鹿でエッチでどうしようもない奴だけど、アタシの可愛い弟なのっ！」

うん、やはり良い姉貴だ。

ただ、時々、「それはどうか？」と思うセリフもあるので、少々惜しい所。それはかすみ姉の本心じゃないんだ、シナリオライターに言わされているんだ、と自分に言い聞かせ、なかったことにしましょう。

・今井香奈恵（近所の未亡人）

主人公を自転車で轢いてしまった、近くに住む未亡人。天然ボケ系。しかし、元人妻ならではのテクニシャン。

ストーリーにも大いに関わり、攻略可能なヒロインですが、二人の姉に対する引き立て役的な登場人物であるのは事実かと。

■美味しいトコ取りで楽しんで

2 タイプのブラコン双子お姉ちゃんに挟まれる姉ライフ、のコンセプトは成功している良作。部分的に見れば、素晴らしい会話やシーンがあり、姉萌え欲求を満たしてくれます。一方、姉ゲーに好ましいとは言えないセリフや大いに不満な場面も残念ながら混入。それらを見なかったことにする覚悟で臨めば楽しめる 1 本です。事前に筆者のような姉好きに試遊させてくれたなら、少なくとも姉属性に大ヒットする作品に改良の余地あり。各メーカー様、全姉連と姉アドバイザリー契約を結んでみませんか？

あまからツインズ～双姉といっしょ～

メーカー	あねせん
ジャンル	ADV
発売日	2006 年 9 月 8 日

…久し振りの故郷の風景にナニやら懐かしい気分に浸りつつも、理不尽を感じていた。俺は「桜樹陸」、元々転勤によって故郷を離れていた俺の家族だが、とうとう海外へ出張が決まり、オヤジとオフクロは俺を残して行ってしまったのだ。

深澤町の伯父夫婦の家に居候することになった俺だが……正直言って不安を抱えていた。あの家には俺の従姉が居る。それも 2 人、双子なのだ。俺より年上の 2 人には、あれこれ苦労させられたっけ……何をするにも危なっかしくて泣き虫な春姉……ガサツでいじめっ子で威張りんぼの夏姉……ああ、不安だ!?

しかし、5 年ぶりに出会った二人はもはや女子大生で、正直かなり女らしくなっていて、俺をドキドキさせた。む、昔は二人とも、やせっぽちで色黒で女らしさの欠片もなかったのに……!?

そんな俺の葛藤をヨソに、さらに衝撃の事実が。なんと伯父夫婦が長期旅行に行ってしまって、留守だというのだ!? 若い娘を残して家を空けるのも不安で、今まで長期間家を空けたことにない伯父夫婦は、しっかり俺を用心棒としてアテにしていたらしい。

し、しかし、そんな二人の姉……双姉たちは、すっかり女らしくなった身体で以前と変わらぬ様子で俺にべったりで……

さらにこの二人、俺の通う学校「深澤学園」に教育実習生としてやって来るという！すっかり俺を頼りにしている春姉、すっかり俺を下僕か何かと勘違いしている夏姉…… こうしてこの 2 人の姉に振り回される、俺の夏が始まったのであった。

■5 年ぶりに再会した双子姉

両親の海外出張に付いていかず、幼馴染みの従姉が住まう伯父夫婦宅に居候することになった場面からスタートする本作。従姉二人が双子になっています。

『あまから』は、その 2 人の双子姉が甘い姉と辛い姉と、対照的な性格を持っている点に由来。

「ギャルゲーのお姉ちゃんを、たった 2 種類に分類しろ」

と言われたら、やはり優しい姉と厳しい姉に分けるのが最も妥当な答えであるように、本作もその常道に沿った姉作りがされています。

■姉ゲーとは何か、分かってます?

伯父の家には、悪魔のような双子がいた。
幼い俺を連れ回し、一生消えそうもないトラウマをいくつも刷り込んでくれた、あの姉たちが。
1 人はいつもニコニコ笑いながら、人の話は全く聞いていない最強の天然娘。
そして、もう 1 人は俺のことをオモチャかペットとしか思っていない究極のイジメっ子。

こんな回想をしながら、従姉達の住む居候先に向かう主人公。いきなりお姉ちゃん達を悪魔呼ばわりですが、まあ姉という存在は恐れ多いくらいの存在でも良いくらいですから。

そして始まる双子姉との同居生活。優しい方の姉・春姉は、優しさを象徴するような豊かな胸の抱擁で、厳しい姉の夏姉は必殺お姉ちゃんチョークスリーパーで、それぞれ主人公を歓迎してくれます。

姉達は学園の教育実習生なので、学園で

もよく顔を合わせることになります。「学校ではお姉ちゃんじゃなくて、「先生」でしょ？」パターンがよくありがちな姉ゲー的展開のところ、本作では学校でもお姉ちゃんと弟の関係が持ち込まれているのは良。姉ゲーならば四六時中お姉ちゃんと弟でいたいので、これはこれで正解です。

さて、５年ぶりに再会して再開した姉弟生活。姉達は持ち前の性格をよく表した行動で弟を構ってくれます。しかし、弟の方は、モニタの前の我々ほどテンションを高くしてくれません。表面上は姉に興味ない風を装っても、実はシスコン…と言うほどでもなく、姉属性でも何でもない普通の弟っぽいのです。リアルで姉のいる友人が、「姉なんてそんなに良いものじゃないよ」と余裕をかますアレに似たものさえ感じます。紛れもなく姉二人が中心ヒロインの姉ゲーなんだから、序盤からシスコンぶりを発揮していいじゃん！と思いながらも、これはこれでリアル姉弟を演出しているのかも知れない、筆者は姉がいないから分からないけどな！とも思って静観していました。

…思い違いであったことも知らずに。

シナリオ中盤から後半。佳境に入るところです。弟主人公の心境に変化が現れます。もちろん、姉を愛する気持ちがふくらむのですが……その描写が普通の恋愛感情なんです。姉弟愛ではない、ふつーの恋愛感情！確かに、姉弟愛と普通の恋愛を書き分けるのは難しいと思いますよ？でも、お姉ちゃんを好きになってしまったドキドキ感だとか葛藤だとか、従姉とはいえ多少の背徳感を出すとか、「姉」相手ならではの心理描写を意識して欲しかった。

弟も弟なら、姉も姉で残念なことになっています。姉ゲーにおいて、いわゆる「姉弟脱却型シナリオ」、つまり「これからは姉と弟の関係じゃなく、女と男として…」は御法度であると、全姉連はさんざん訴えてきました。図式化すれば、

姉弟　＞　恋人　＞　お友達

が、我ら姉属性の常識だからです[1]。

なのに、春姉と主人公がに結ばれて、幸せの絶頂とも言えるその瞬間、二人は今日から恋人よ、と喜んで春姉が口にした後に続くセリフ！

> 春歌「だってもう、弟じゃないものね」

ノォォーーーーーーーーーーッ！

これでは姉弟関係の絶縁を言い渡されたも同然。どう善意に解釈しても、救いようがありません。にこにこして幸せそうな春姉の表情が、かえって心痛む。お姉ちゃんは悪くない、脚本家が悪いんだよ…と慰めるのでした。

夏姉ルートも、姉弟ならではの展開がなく、「気が強くて、弟なんて下僕扱いだけど、本心では…」といった描写も薄め。やはり普通の恋愛関係と大差なくなってしまっていました。もったいない。

春姉と夏姉の関係も、双子ならではの息が合っているとか、逆に対抗心を持っている等もなく、普通の姉妹と大差ありません。

スペック的な面では、絵や音はおおむね平均的。昨今の美少女ゲームに比べ、後半までＨ要素は控えめで貞淑。また、本作は「優姉といっしょ」の続編となっていますが、優姉と諒子先生が登場する程度で、ストーリー上の直接的な繋がりはありません。前作のプレイ経験は不要でしょう。

■キャラクター

・桜樹春歌（双子の上の姉）

天然・癒し系の優しいお姉さん。甘いお

[1] 従って、主人公とヒロインが姉弟の場合、既にそのゲームはフラグ成立・目的達成とも言えます。なお、「姉弟」の関係を依然持ちつつ「恋人」が付加されるのは問題ありません。恋人お姉ちゃん！

姉ちゃん要素担当で、家事を一通りこなす世話好きの良姉です。可愛い弟が帰ってきたと喜び、うきうきする春姉の姿にいやされます。

やや思い込みが強かったりする他は、大げさな甘やかしや、奇抜な言動、行動はなく、姉ゲーにしては比較的真っ当なお姉ちゃん。もうちょっと特徴を出しても良かったかなとは思いますが、変にいじられると、良い意味での「真面目さ」が失われてしまいそうなので、これで良かったのかも。

・桜樹夏海（双子の下の姉）

弟は姉の手足。言うことを聞くのが当然であって、逆らうことなど理論的にありえない。そう信じて疑わないような、女王様系お姉ちゃん。

> 子どもの頃も、よく同級生の男子と自転車で競争してたのを覚えている。
> 「負けるとパンツ脱がされて川に捨てられるんだよな……」
> 勝ったところで、かんしゃくを起こした夏姉にボコボコにされるのだ。そして夏姉が勝つまで、何度でも勝負は繰り返される。当時、夏姉は深澤町の女ジャ○アンと恐れられていたものだ。

小さい頃に植え付けられた、姉には絶対服従の精神は未だに抜けきれず、5 年ぶりに再会した今も、姉弟の主従関係は健在。年を重ねて大人になった分、弟のからかい方に磨きがかかり、姉に振り回されっぱなしの弟気分を味わわせてくれるお姉ちゃんです。ブラコンの照れ隠しのからかいではなく、持って生まれたような女王姉気質なので、ある意味リアルな姉ヒロイン。

・麻倉貴美（軍属系風紀委員長）

絵に描いたようなメガネの風紀委員長。学年は上なので先輩にあたる。風紀委員長の響きから期待されるキャラクターをきっちり演じてくれていて、安心して見ていられます。

ところで、母親の美夜さん（小料理店を営む若女将）は、和服の似合う妖艶な女性。どうして彼女が攻略が出来ないのかと泣きました。

・中条ちえり（同級生）

同級生ながら年下の雰囲気バリバリの妹系。どうしようもなくシスコンの兄（＝学園の教師）を持つが、鬱陶しく思っているらしい。

・二之宮薫（同級生）

女の子と見まがうような紅顔の美少年。体つきもきゃしゃで、どこかはかなげ。一応は攻略可能キャラです。

・相川縁（先輩）

童顔で線の細い体に女装が加わり、全く男に見えない男の子。先輩。

いつも笑顔を絶やさないが、裏で何を企んでいるのか分からない曲者。

前作からの持ち上がりのキャラで唯一攻略可能キャラです。男同士でも可愛ければ OK だという人ならば。

■姉ゲーの基本からやり直し！

双子姉…以前に、姉ゲーとしての基本が不十分な 1 本でした。姉との日常を描いている部分は何とか楽しめるのですが、いざ盛り上がってくるシーンになると、どこのギャルゲーにでもあるような平凡な恋愛モノに成り下がってしまうのが残念。姉を中心的ヒロインに据えたゲームを製作するのなら、「姉弟愛って何だろう」という所から真剣に考えて作って欲しいものです。

姉ゲー＝姉を恋人にするゲームではないのですよ？

【我林さん寄稿レビュー】
『影≒光』（シャドウ・ライト）シリーズ

著者	影名浅海（かげな あさみ）
イラスト	植田亮（うえだ りょう）
発行	集英社スーパーダッシュ文庫

退魔を生業とする陰陽師の家系「星之宮」、ここに双子の姉弟がいる。姉・御影は陰陽師の才能にあふれ、将来を嘱望されている。対する弟の光輝はいくら修行を積んでも、陰陽師としての才能は開化せず、父からも疎まれる存在。ある時、光輝は偶然出会った魔術師オルトに「精霊を視る能力」を見出され、修行のためイギリスへと旅立つ。

約１年後、精霊術を身に付けた光輝は今まで自分を疎んじていた父に勝負を挑むために帰国。それが全ての事件の始まりだった。

■ライトノベルにおける数少ない「姉萌え」作品

本シリーズは、ジャンル的には退魔アクションがメインであるが、今回はそれについては敢えて触れない。ここでは、「姉萌え」のみに観点を絞りレビューを行いたい。

この作品は数あるライトノベルの中においても、「姉弟」が主人公であり、かつ「姉萌え」要素がふんだんに鏤められた本格的優良姉ラノベである。

もともと「姉弟」が活躍するライトノベル作品自体少なく、それに加え「姉萌え」要素ともなると、どうしても今ひとつという状況だった[1]が、ようやくここに至ってライトノベル界においても「姉萌え」が開花したといえる。

[1] 他の「姉弟」メインのライトノベルとしては、『擬似人間メルティア』シリーズ、『拝啓、姉上様』シリーズ、『ゆにこん』（富士見ファンタジア文庫、『だめあね』シリーズ（ファミ通文庫）など

■主要登場人物

・星之宮御影（ほしのみや みかげ）

退魔師の家系・星之宮家の双子の姉。高校２年生。陰陽師としての才能は並以上。弟・光輝のことを常に心配しているブラコンお姉ちゃん。朝に弱い…というより一度寝ると目覚めることはない（笑）……ほとんど毎日弟に起こしてもらわないと目覚めない甘えん坊お姉ちゃん。でも、いざというときは弟をビシッ？とお説教できる。普段の一人称は「私」だが、弟に対しては「お姉ちゃん」となることが多い。

夢は弟と二人で退魔の仕事をすること。

カバー折り返しの人物紹介では第１作目「少々ブラコンの気がある」→第２作目「ややブラコン気味」→第３作目「（弟を）溺愛している」と巻を重ねる事に表現がパワーアップ（笑）

と、いっても１作目から「少々」どころでないブラコンぶりである。

・星之宮光輝（ほしのみや こうき）

御影の双子の弟。陰陽師としての才能は皆無。父に疎まれ、姉の才能に嫉妬していたこともあるが、「嫌いにはなれなかった」というまさにシスコンな弟君。オルトとの出会いをきっかけに強くなるため、父を見返すため、そして何より姉と一緒に仕事をするという夢のため、単身イギリスへと旅立つ。精霊術としては類いまれな才能『アウストラル界を視る目』を持つ。通常、精

霊術師は一つの属性の精霊しか操れないのに対し、光輝は複数の属性の精霊を召還できる。

趣味はチャネリング（後述）で姉をからかって、その反応を楽しむこと……面と向かってだと、逆に姉にからかわれてしまうため……素直になれない照れ屋な弟、ていうか、それは完全にシスコンだよ、心の底からシスコンだよ、救いようのないシスコンだよ（笑）

３作目の人物紹介で初めて「ややシスコン」と書かれますが、１作目から間違うことなきシスコンぶりを発揮してくれます。

・ルーシー・キャロル

第２作目より登場。オルトの孫娘で、光輝の「師匠」。修行の時以外は「師匠」と呼ばれるのを嫌う。１９歳ながら一流の魔術師。陰陽術では才能ゼロだった光輝を１年で実戦レベルまで鍛え上げた。短気で怒りっぽい、ヤキモチ焼きなツンデレ系お師匠さん。光輝のことを好きなのであるが、全く気付いてもらえず余計に苛立つ今日この頃。三姉妹の末っ子……惜しい（何が？）。御影にとっては弟に近付く「悪い虫」

■重要キーワード『チャネリング』

お互いの魂を繋げることにより、どんなに離れていても会話ができるテレパシーのようなもの。１作目を除き、御影お姉ちゃんは日本、光輝はイギリスにいるため、姉弟のコミュニケーションはこれが中心となる。弟が姉を毎朝起こすのにもこの能力を使っている。離ればなれの姉弟にとっては日課のようなもの。ルーシーが不機嫌になる原因のひとつ。

「おまえにチャネリングするとき、何か知らないけど急に不機嫌になるんだよなぁ……何でだと思う？」

「……ごめん、お姉ちゃんには難しすぎてさっぱり……」

→鈍感な弟君とカマトトなお姉ちゃん（笑）のチャネリングより

■双子の「姉弟」…されど「姉」

双子の姉弟と言えば、『Ｆ．Ｆ．Ｕ（ファイナルファンタジー＝アンリミテッド）』のアイとユウ、『武装錬金』の早坂姉弟などがいるが、「姉萌え」としてどうだったかと言えば、不十分だったと言わざるを得ない。

特に早坂姉弟は期待十分な姉弟だっただけに、あの結末には納得のいかない諸弟も多いのではないだろうか。

また双子の姉弟というのは、年齢差というものがないに等しい。それだけにきちんとした「姉弟関係」を描くのはなかなか難しいものがある。だが、他の「姉弟」と違い、母親の胎内で生命が形成されたときからの「姉弟」であり…「双子の兄妹」になる危険性はここでは無視（笑）…まさに生まれながらの「姉弟」、ある意味で理想の「姉弟」のかたちといえるものである。

年齢差はないに等しいが、それでも立派な「姉」になれることは、弟と同じ日に生まれた海お姉ちゃんを見れば分かるのは言うまでもないことである。

以下の様子から御影お姉ちゃんのブラコンぶりをご覧戴こう。

■単なる「溺愛系お姉ちゃん」にあらず

御影お姉ちゃんは弟・光輝をまさに「溺愛」と言ってよいほど気に掛けているわけであるが、かといって「ダダ甘」な感じではない。むしろ、朝起きられないのを毎日弟に起こしてもらっている点を見れば、弟に甘えているお姉ちゃんである。そして、何よりも弟が自分の傍にいないことを本当

は寂しいと思っている。実は寂しがりやなお姉ちゃんではないかと思う。

しかし、弟が強くなるためにイギリスで修行の道を選んだこと、それが将来の「姉弟二人で退魔の仕事をする」という夢のためだということは十分理解しており、決して邪魔をしてはいけないことも心得ている。溺愛しているとはいえ、「可愛い弟には旅をさせる」ぐらいの度量は持っている強いお姉ちゃんでもある。そのためにルーシーという師匠の能力や必要性も評価している。

ただし、あくまでルーシーを認めるのは弟の「師匠」としてであって、それ以外では「悪い虫」として常にその存在を弟からなるべく遠ざけられないかと考えている。ちなみに弟に近づく女性を「悪い虫」と見るのはいわば「姉性本能」であり、姉として当然の行為である。

■甘えん坊お姉ちゃん

御影お姉ちゃん最大の弱点は起床。一度眠りについたお姉ちゃんは眠り姫よろしく決して目覚めることはない（笑）。そんなお姉ちゃんを目覚めさせる唯一の方法、それは弟が起こすこと。ほとんど毎日、姉を起こすのが弟の日課。この部分においてはお姉ちゃんは弟に完全に甘えきっている状態。弟にとっては姉に対して優位に立てる唯一の機会でもある。お姉ちゃんが「光輝が甘やかすから、甘えてしまう」と反抗しようものなら、「じゃあ、これからは甘やかさない。とりあえず朝は一人で起きろ」と言われ、それだけでお姉ちゃんは大慌て。結局「お姉ちゃんが悪かったから……（中略）……だから、これからもずっと、光輝に甘えさせて下さい」と謝ってしまう始末。でも、御影お姉ちゃんは恥ずかしげもなくこの科白を口に出来る。弟には出来ない芸当である。

■弟に「悪い虫」が付かないようにするのは姉の性

御影お姉ちゃんは弟に好意を寄せる女性には容赦がない。親友である菜緒子（光輝のことが好き）に対してさえ、「私の光輝は渡さないからね」と言い、それに対して「ブラコン丸出し」と言われようが「（弟を）必要以上に愛していて当然」と切り返す。また菜緒子の、母親のような気配りのよさを誉めつつも「だからといって私たちが義理の姉妹になることは絶対にないけどね」と、親友ですら弟がからめばこんな扱いとなる。ましてや「師匠」ルーシーに対しては……

弟がニブチン君でルーシーの想いに全く気が付かない……姉は既に感づいている……ことに「お姉ちゃん、今ほど安らぎを感じたことはないわ」とほくそ笑み、弟がルーシーの機嫌が悪くなることを相談すると、「無視しなさい」と明らかに間違ったアドバイスをして、弟と「悪い虫」がこれ以上親密にならないように画策……実は腹黒い一面を持つお姉ちゃんでもある。

「それとも何？　お姉ちゃんを五日間無視することは出来ても、お師匠さんを無視することは出来ないっていうの？」

こんなことを姉に言われて逆らうことの出来る弟はいるだろうか？

■「好き」と言わせる姉、「大好き」と言える姉

本シリーズにおける、最大級の「姉萌え」的見せ場について書いておきたい。

第３作目における新登場人物・紀詠狭霧[1]

[1] 紀詠狭霧（きえいさぎり）第三作目の準主役、星之宮と同じ退魔師の家系。おそらく妹シスコン

は、妖魔化して多くの人々を殺している兄を憎み、自らの手で殺さなくてはと考える。そんな狭霧を思いとどまらせようと御影お姉ちゃんは説得するのだが、失敗してしまう。その時、かつて弟・光輝も父を憎み、才能のある姉にも「嫉妬していた」ことを思いだし、不安に駆られる。弟は「嫉妬していたが嫌いにはなれなかった」と言ってくれたが、果たして、本当に弟は自分のことを好きでいてくれるのか、と。我慢できなくなった御影お姉ちゃんは弟にチャネリングをする。

「私のこと、好き？」……単刀直入な姉の質問に弟は戸惑う。もちろん、光輝の姉に対する気持ちなど決まりきっているのだが、照れくさくてとても口に出して言えない。何とか口に出したのはかつてと同じ「嫌いにはなれなかった」という返答、お姉ちゃんは納得しない。「はっきり言ってくれないと……不安になる」……姉の不安な感情に根負けした形の弟は誰に見られているわけでもないのに顔を真っ赤にしながら「好きだよ」と告げる。

「うわぁ、実の弟に告白されちゃった。お姉ちゃん、困っちゃうなぁ」

冗談めかした科白の中に御影お姉ちゃんの心からの喜びが表れている。しかし、それだけでは、終わらないのがやはり御影お姉ちゃんが「姉」である真骨頂。

「私もね、光輝のこと大好きだよ。世界で一番愛している」

この世界で一番照れくさい科白を御影お姉ちゃんは恥ずかしがるどころか何の躊躇いもなく言い切ってしまう。まさにブラコンお姉ちゃん、弟より一枚も二枚も上手である。

これだけ見ると、遠距離恋愛のバカップルが国際電話で「愛の告白」という雰囲気。しかしだからと言って、「姉弟」の関係が崩れることはなく、むしろこの告白劇により「姉弟の絆」がより深まっている。

これは姉ノベルにとって非常に重要な要素。どちらかが他の異性に走ったり、「姉弟」の関係がただの「恋人同士」になってしまうようでは、折角の「姉萌え」ノベルも台無しになってしまう。

その点、著者の影名浅海氏は「姉萌え」の何たるかを十分に理解しておられるのではないかと思う。

■「師」ではあっても「姉」ではない

「師匠」こと、ルーシー・キャロル１９歳。師匠、年上、ヤキモチ焼き……「姉」になる要素を十分に備えていながら、残念ながら彼女は「姉」になることはできなかった。それは、彼女がすでに「弟子」としてではなく、一人の「男性」として光輝を意識してしまっているからである。いくら「姉」となる要素があっても、当人が相手を「弟」として（無意識でも構わないから）扱わなければ、決して「姉」にはなれないという良い例ではないかと思う。

三姉妹の末っ子というのは、実は特に問題ではない。末っ子でも「弟」を持つことで「姉」へと昇華したお姉ちゃんが過去に多くいることは諸姉諸弟もご存じの通りかと思う。だから、本当に惜しいと感じるのである。

■良き姉の影に、良き弟の輝きあり

「姉萌え」というものは、ただ単に良き姉がいれば成立するものというものでもない。もちろん、良き姉の存在は「姉萌え」に必要不可欠ではあるが、いかにお姉ちゃんが良き姉であっても、弟への愛情が一方

通行で終わってしまったりしては、片手落ちで物足りない、むしろ、せっかくの良き姉も弟の姉に対する態度次第では全体をぶち壊しかねない。

その点に置いて、光輝という弟は及第点十分な「良弟」である。才能のある姉に嫉妬しつつも、憎むこともなく、むしろ大切に思っているところ。文句を言いながらも毎朝姉を起こしては、姉をからかい、その反応を楽しんでいる点は、重度の「お姉ちゃん依存症」と認定してもよい。イギリスで修行しているのも、強くなるためであるが、それは強くなって、姉と一緒に退魔の仕事をできるだけの力を身に付けたいからであり、弟の姉に対する思いは、決して姉から弟への愛情に負けてはいない。

御影お姉ちゃんを心配し、修行を中断して、日本に帰ろうとしたり、紀詠狭霧の登場にヤキモキしたりと、弟は弟で姉のことを思っている。

双子だからと言うべきか、二人は似たもの姉弟、その絆は並の姉弟よりも遙かに深い。

■第4作目への期待

第３作目において、御影お姉ちゃんは気になる発言をしている。いつもの弟とのチャネリング、日本の姉にとってはイギリスにいる弟とコミュニケーションがとれる唯一の機会、しかし、弟の傍にはルーシーがいる。チャネリングは声を聴くことは出来ても、姿を見ることはできないし、傍に行くこともできない。

（夏休みに入ったら会いに行こう）は、御影お姉ちゃんの偽らざる本音、そして、単に可愛い弟に会うことだけが目的ではなく、ルーシーに「うちの弟に手を出すな」と一言言わずに置くべきか、という想いでいる。従って、続編ではいよいよ、御影お姉ちゃん渡英、弟をめぐって「姉」と「師」の直接対決と考えてよく、姉萌え的に期待十分である。

また、逆にルーシーの方から「日本で修行よ！」と称して、自ら日本に乗り込み、御影お姉ちゃんと火花を散らす、という展開もありえる。舞台が日本の方が、超天然で子煩悩な澪ママ[1]も活躍できて、後者の方が面白そうだと思う。

いずれにしても、はやく「姉」対「師」を見たいというのは、姉属性に限らず、『影≒光』ファンの願いでありましょう。

■総評

「姉萌え」ノベルとしては十分に合格点の作品であり、続編が楽しみなシリーズである。

ただし、メインは退魔アクションであり、この点ではまだ荒削りな部分が目立つ。また、各作品とも、敵役が百人以上の人々を簡単に殺していたり、星之宮家の理想主義的な正義感や事件の解決の仕方に不満や抵抗感を覚える人がいるかも知れない。

この点については作者もまだ若き新人[2]であり、今後の成長に期待したい。筆者としては、この辺は目をつむり、御影お姉ちゃんの「姉萌え」ノベルとして、諸弟には楽しんでもらえればと思うし、むしろ、影名氏には、「姉萌え」の面を強化し、そのまま突っ走ってもらいたいと考えるものである（笑）

---

[1] 星之宮澪（ほしのみやみお）御影・光輝の母。子煩悩で超天然。息子・娘を分け隔てなく溺愛する。「その母あって、その娘あり」という典型的見本。

[2] 新人賞佳作受賞時は 19 歳。歴代最年少の受賞者である。

kiss x sis（キスシス）

著者	ぢたま某
連載誌	別冊ヤングマガジン（隔月刊）

中学 3 年生の住之江圭太には，継母の連れ子で血のつながっていない高校 1 年生の双子の姉がいる。利発な上の姉「あこ」と口数の少ない下の姉「りこ」で，二人とも圭太のことが大好き。だが圭太は姉に惹かれながらも，なんとか一線を越えないように踏みとどまっている。

■帰ってきたツインズ姉ちゃん

現在の姉コミック界で双子のお姉ちゃんといえば，100 人中 100 人が「あこりこ！」と答えるであろう，双子姉漫画の代名詞がこの「kiss×sis(キスシス)」です。定期的な連載開始は 2005 年 12 月発売の別冊ヤングマガジンから。同誌は新人作家や読み切りを主体とした[1]隔月刊のため，本号が発行される 2006 年の冬コミ時点ではようやく第 7 話が掲載されており，なお好評連載継続中。

隔月刊のため，1 話読んだら次は 2 か月も放置される苦行を強いられるのですが，もともと連載すら夢だった[2]ことを思えば我慢我慢。それくらい姉属性にとってはありがたい姉分補給コミックなのです。

■弟争奪戦型双子姉漫画

中 3 の主人公・圭太の上にいるのは，双子の姉で「あこ姉」と「りこ姉」。両親の再婚によりできた義理の姉弟ですが，小さい頃からの関係なので，気持ちは実の姉弟並。お姉ちゃんズに興奮させられると「(血は繋がってないけど) 姉ちゃんにドキドキするなんて……っ」的に葛藤するくらい，圭太から見てあこ姉りこ姉は実の姉同然。そんな姉二人は，いずれも弟の圭太ことが好きで好きでたまらない…（これは当然）

しかし，弟の心と体は一つだけ。そこで始まる弟の奪い合い。二人の姉はお互いに得意な手段で，あるいは相手の裏をかいて，圭太を射止めようとあの手この手で絡んできます。あこ姉りこ姉は決して仲が悪くはないのですが，お互い対抗心が強い性格なので，「姉弟 3 人揃って仲良くハーレム型」ではなく，「弟は私のもの！弟争奪戦型」でほぼ一貫しています。

双子の姉は，単純に対照的な性格ではないのが特徴。強いて言えば陰と陽になるのでしょうが，他にない個性が込められたお姉さん。一方弟の圭太は，ブラコンをはばからない姉と異なり，普段は平静を装うものの，実は重度のシスコン。時折見せる姉への純な想いがカッコイイ。良き姉モノ作家は弟の描き方が上手い，という見本です。

■キャラクター

・住之江あこ（上の姉）

活発で積極的な行動派，思ったことが口に出やすく，感情表現も豊かな姉。キス魔。りこ姉には月夜が似合うとするならば，あこ姉は晴れた日が似合う，そんな姉。

---

[1] 作者のぢたま某先生はベテランですが。

[2] 全姉連会報第 2 号参照。本作品の初出は，2004 年 2 月発売の週刊ヤングマガジン誌の 1 話読みきりでした。

・住之江りこ（下の姉）

口数少なめで淡々とした話し口調で，一見クールに見える面もある。しかし，あこ姉以上に大胆な行動に出ることが多く，武道系らしい弟攻撃の強さも兼ね備えている。

■各話紹介

・1st×kiss 一つ屋根の下

あこ姉りこ姉に夜這いまがいの起こされ方をする圭太。学校で，体育教師に姉との関係をからかわれたことが発端で，手を捻ってしまう。不自由している弟を見かねたお姉ちゃんズの過激な介護！

圭太「俺の姉ちゃんたちを……バカにするな！！」

・2nd×kiss ふたりのかけひき

圭太の手の怪我で通院に付き添うあこ姉。病院ならではの迫り方をするあこ姉に対し，それを止めに来たりこ姉の「女の武器」による衝撃的な攻撃。直接的なエッチ＝りこ姉担当？を強烈に印象づけた回。

あこ「圭ちゃんからのキスなんて小学四年の時以来だもんね…ちょっとドキドキするわ…」

・3rd×kiss これって三角食べ？

依然手の怪我をしている圭太にご飯を「あーん」させたり，受験勉強の面倒をみたりするあこ姉。巧みにりこ姉を寄せ付けず，弟と二人っきりの部屋であこ姉は…。

圭太「りこ姉だけじゃなくあこ姉にまで反応しちまったら…俺は弟としてこの先どうすれば…」

・4th×kiss 恋人の資格

学校帰りに寄った神社で圭太は，弟の合格祈願をするあこ姉りこ姉と出会う。あこ姉りこ姉との恋愛成就を願う絵馬の数々を見つける圭太。純粋にお姉ちゃん達のことが好きだった小さい頃の気持ちを思い出し，よその男に取られたくない，そのためには姉と一緒の高校に絶対合格すると決意する。姉を想う気持ち，弟を想う気持ちそれぞれが，静かに，しかし力強く現れる回。

圭太「どこの馬の骨とも知れん奴に，あことりこを渡せるかっ！！」

・5th×kiss 合格圏内の男

あこ姉りこ姉が中学に進学した頃の回想。圭太は精神的自立期を迎え，姉にも素っ気ない。寂しいあこ姉りこ姉は，この機会に弟離れしようと同級生らと付き合ってみるが，誰ともしっくり来ない。そんな中，陸上部で逞しく駆ける圭太を見て…。

りこ「あたし今すごく圭太の顔が見たい…」
あこ「…あたしも」

・6th×kiss ロクでなしの男

受験の息抜きと元気づけでクリスマスカラオケにやって来た 3 姉弟。間違って運ばれてきたお酒を知らずに飲んだ圭太とあこ姉は…。ぢたま先生の本領発揮，人前ではとても読めない姉弟エッチ大感謝祭。

あこ「圭ちゃんの元気がなくなってきたらお姉ちゃんの元気分けてあげるから　いつでも好きなだけ甘えていいんだよ」
圭太「うん…じゃ遠慮なく」

■双子姉コミックの最高峰

以前より姉モノを描くことがお得意だったぢたま先生ですが，キスシスはその才能が遺憾なく発揮された傑作。漫画としての組み立ても文句なし。思春期真っ盛りの主人公が，積極的な双子の姉に挟まれ振り回される素晴らしい姉コミックを貴弟もぜひ。

kiss x sis

はじめましての方、はじめまして。ReNNoSのキョルノフと申します。
前回に引き続き、今回も全姉連会報のページをあずかることになりました。お目汚しであります。
「ん～、今回“双子お姉ちゃん”特集なんだよねぇ～～。1ページ描かせてあげても良いんだよぉ～？
そうそう、良いキャラがいるじゃないか。双子のキス魔お姉ちゃんズが～～？」
なんて言い方を総裁からされたので「kiss x sis」より、あこりこお姉ちゃんズです。
1ページに2人も描くのは無理だっつーの!
っつーか、こっちに選択肢を与えてくれないのよ、この人ってば!
めっちゃ遠まわしに「kiss x sis以外ゆるさん」みたいな命令出して来るんだもん。この駄犬!!
くやしいので原作とは程遠い私の絵柄でのあこりこお姉ちゃんズにしました。
原作はこんな絵じゃないです。すみません。
あと、もう少し買いやすい雑誌に連載してください。講談社さん。ホントに。

あねあねハーレム～お姉ちゃんはふたご先生

著者	上原りょう
イラスト	志水なおたか
発行	フランス書院美少女文庫・2006 年 10 月 20 日

「世界でいちば～ん、私たちが大好きだって、証明して！」

香織、沙織、環、樹…双子姉妹 2 組による究極すぎるハーレムレッスン。Ｗフェラチオ、Ｗパイズリ、そして四連続の膣内射精。みんな、ずっと愛していきたいから。めくるめく快感のなか、直哉は姉たちの奥に、顔に、想いの丈を爆発させた。

■双子姉は増えてもイイネ！

文庫の双子お姉ちゃん作品は，こちらの『あねあねハーレム』から。

お姉ちゃんが双子なら，両手に花で嬉しいなっ…と喜んでいるようではまだ甘い！もし双子姉が 2 組だったなら，2×2＝4 倍お姉ちゃんに可愛がってもらえる。そんな夢をあっさり実現したのが本作品です。

■双子姉×2の相乗効果！

本作が他の双子姉モノと大きく異なるのは，双子の姉が 2 組いるということ。「多ければ良いってものじゃなし，しかも特に厚くもないこの一冊に 2 組も詰め込んでしまって，ぐだぐだなんじゃないか？」と，初めは思っていました。

が，これが意外とすっきりまとまっていて読みやすい。そして，双子姉を 2 組登場させることで，単に人数が増えるだけではなく，面白い効果を生むことに成功しています。

本作には「香織＆沙織」「環＆樹」の 2 組のブラコンお姉ちゃんが登場します。それぞれのペア内部では，互いに双子ならではの対抗心を持つのと同時に，気心の知れた姉妹でもあります。

ここで，例えば「香織＆沙織」ペアが可愛い弟にアタックし，こっそりとイチャついたとしましょう。その最中は香織と沙織，主人公の間でめくるめく姉弟の睦み合いが繰り広げられます。

では，その事を「環＆樹」ペアが感づいたらどうなるでしょう？「香織＆沙織」ペアに抜け駆けされた，可愛い弟を取られたくない，私たち「環＆樹」ペアの方が，もっと弟を愛しているんだ…となるのは火を見るより明らかですよね？

つまり，双子ペア内の対抗関係だけでなく，「香織＆沙織」vs「環＆樹」による弟争奪戦という側面が新たに発生する訳です。

さらに面白いのは，各双子ペアから 1 人ずつ選抜された，交流戦とも言うべきシーンがあること。「香織＆沙織」ペアには「香織＆沙織」ペアの持つ雰囲気があり，それは「環＆樹」ペアにももちろんあるのですが，本来双子ではない「香織」と「環」がペアを組んで弟に迫ってきたらどうなるか。異種格闘戦…とまでは言いませんが，ちょっとした妙味を感じ取ることが出来るでしょう。

■姉同士の関係にも注目

本作はフランス書院の中でもライトノベ

ルブランド「美少女文庫」からの刊行なので，各登場姉には萌えキャラ的な性格設定やセリフ回しが多用されています。

4 人の姉それぞれに個性が与えられているのは当然としても，さらには姉と姉の間の人間関係も織り込まれています。かの名姉ゲー『姉しよ』では，姉と弟の関係だけでなく，姉と姉の関係もしっかりと描かれていましたが，それと似た演出が本作にも含まれています。

さすがに文庫の紙幅の関係で 4 人の姉相互の全パターンを網羅するには至りませんが，最も特徴的なのは「香織」×「環」の関係。あっけらかんとしてお気楽な性格の長女・香織姉と，生真面目でクールな三女・環姉は，そりが合わない姉妹コンビ。香織姉が軽口を叩けば，真面目な環姉はまともに言い返し，香織姉は面白がってさらに言い足し，やめればいいのに環姉はまた言い返す…のが麻倉家名物だとか。

（環と樹は見分けが付かないとの話題になって）
香織「えー。うーん…どっからどう見ても一緒よ。コピー製品みたい……違法複製？」
環「ッ！姉さん達も一緒の顔じゃないッ！一緒よ，一緒！」

こうした姉と姉との姉妹関係が見て取れると，俄然その姉弟姉妹の魅力が増します。作品内では描かれなかった組み合わせ，例えば長女の香織姉と末っ子の樹姉だったらどんな関係なんだろうか，と想像してみるところまで，筆者は楽しんでいたりします。

せっかく姉ヒロインが複数登場するのにも関わらず楽しくない作品は，この「姉相互の関係」がおろそかになっているからだと断言できます[1]。

[1]『姉しよ』と同時期に発売された多人数姉ゲー『アネもネ』はその例。姉同士が絡むシーンに乏しく，姉が 6 人も登場する大家族なのに，寂しさを感じてしまうゲームだった。全姉連会報創刊号参照。

■クオリティは十分。ただ…

ライトノベルを好んで読むような若年層向けの文庫だけあって，始終明るい雰囲気に包まれ，安心して読める作品です。実は，活字の本より漫画やゲームという現代っ子的な筆者が最後までじっくり読めたのですから，小説はちょっと…と敬遠気味の貴弟だったとしても大丈夫。

一卵性双生児の双子が，しかも 2 組も登場しますが，良く書き分けが出来ていると思います。表紙カバーやカラー口絵，挿絵もありますが，自ずと自分だけの 4 姉妹が頭に浮かんで来るはず。きっと声付きで。

普段の言動や仕草などの文章は，ごく普通のライトノベルと比べても標準的ですが，H シーンになると突如，「フランス書院」ブランドの伝統が牙を剥きます。官能小説的言い回しが乱舞し，濃密な描写の連続。著者の「上原りょう」先生は，本作が美少女文庫デビューだそうですが，実は別の名前で本家フランス書院文庫を書かれていたりするのかも知れません。

基本は萌え系の軽妙な文章が書けて，H シーンになれば一転濃厚な描写は良いのですが，姉属性の弟心を掴み切れていない部分もあります。主人公は赤ん坊の頃に両親が他界して伯父に引き取られたため，姉 4 人は実の姉弟ではなく従姉弟なのですが…

四姉妹との関係が従姉弟だと分かった時、直哉は嬉しかった。そればかりか、従姉弟同士なら結婚できるとさえ、考えてしまったのだ。

『あねあねハーレム』に興味を持って買う読者で，「実姉じゃなくて従姉だ～！」と喜ぶ人が果たして存在しますか？加えて，他人同士が夫婦として生活を共にするという結婚なるしきたりは，生まれてから死ぬまで一生肉親としての縁が切れない姉弟関係の尊さに比べたら全然大したことはない

のをお分かりですか？従姉弟であることを上手く活かした展開があったり，あるいは実姉は NG との内部基準があるのなら別ですが，敢えてそんな設定を押し込まなくても，と思わずにいられませんでした。

また，「お姉ちゃんはふたご先生」のサブタイトル通り，4 人の姉全員が主人公の通う学園の教師です。ただ，教師と生徒としての要素は薄味。「女教師」志向の姉属性ならば，この点割り引いて考えた方が吉です。

なお，主人公は大人しくて内向的な性格なので，姉にはひたすら従順。強引な場面はゼロですので，その点気になる弟さんはご安心を。

■キャラクター

・麻倉香織（上の双子の姉＝長女）

脳天気と言えるほど陽気で，ちょっとお調子者の姉。隙あらば，「なおー，遊ぼうよ～」と猫チックにすり寄ってくるお姉さん。自慢のバストに弟の顔を埋めさせ，窒息死させかねないような，ある意味危険な姉。

「なおー，まだ時間あるよー。今ならもうちょっと一緒にいられるよ，どう？もう一回，お姉ちゃんのぷにぷにのおっぱい，さわってみない？」

長女＝おっとり・天然系のお約束を打ち破る姉です。度を超した弟の可愛がり方を妹たちにたしなめられるぐらい，積極的かつオープンに弟を誘惑してくれます。

・麻倉沙織（上の双子の妹＝二女）

香織姉とは対照的に，人見知りで大人しめの姉。男性恐怖症。もちろん弟は例外。ブラコン型としては，なかなか想いを伝えられずに内に秘めてしまう，恋する乙女のようなタイプ。料理上手で，お母さん的な側面も。

「……あ。な，直くん，……私のおっぱい，揉んでもいいよ」

・麻倉環（下の双子の姉＝三女）

黒髪ストレートロングの大和撫子で，威厳さえ感じられるクールビューティーな姉。ビシッと決まったパンツスーツが物語るように，性格は生真面目。故に，香織姉の奔放な行動に頭を痛める毎日。弟に対しては，厳しくしっかり育て上げることが姉の使命と言わんばかりの態度だが，内心では他の姉に全く引けを取らないブラコン。そして，実はもっとも 4 姉妹の中でウブ。

「そうだ，お前のようなダメ弟を矯正するため…下着は着けてこなかったの！」

・麻倉樹（下の双子の妹＝四女）

口数少なく，表に感情を出さない綾波系。セリフはひらがな表記が基本なのも，その性格をよく表現しています。姉からは積極的にアプローチしないが，弟の成長を静かに見守り続けてくれるタイプ。

普段，何を考えているのか掴みにくいだけに，大胆な行動に出たときの意外性が魅力の姉です。

「……直哉，……おしおき……」

■姉ゲーになったらイイナ！

２組の双子姉を，たった一冊の文庫へ巧みにギュッと濃縮した姉ノベルです。読後の満足度は，ちょっとした姉ゲー１本分に値するのではないかと思います。ページの半分以上は姉弟のラブシーンですが，隙間を縫って姉達の想いが綴られていたり，ささいな設定にも，その理由となる姉弟間のエピソードが添えられていたりして，限られたページ数の中，良くできています。

双子姉たちの個性が光る本作。これが原作となって姉ゲーになったらさぞ面白いだろうと思わずにいられませんでした。

こんにちは千里きりんです。
表紙を任せてもらった夏から早くも半年が過ぎ
おかげさまで仕事の依頼も増えました。
夏コミから明らかに忙しくなったので、
これも一重に全国の弟さんのおかげだと感謝感激です。
実は漫画を描かせてもらえる予定だったのですが
構成期間の問題で形になるのはもっと先になりそうです。
それでは総裁さんに申し訳ないということで
今回はゲストでの参加になりました。
私の詳細はＨＰきりんの憂鬱にて↓
http://kirinnoyuuutu.bufsiz.jp/

ここにおりますのは「君が主で執事が俺で」から
発売前なのに早くもお馴染みの「久遠寺森羅」さんです。
全く似てないので、詳細が気になる方は
「みなとそふと」オフィシャルページを参照ください。

第 6 号「双子姉」特集、いかがだったでしょうか。

双子それ自体がまだ難しいのか、もっと練り込む余地のある作品が多かったですね。

お姉ちゃんに可愛がられたい。時にはいじられたい。二人同時に。一つ屋根の下で。僕ら弟たちは、どこまでワガママになれば気が済むのか？

◆

今回、表紙を描いてもらったキョルノフさん。いつもありがとう！2006 年は妻・ママ・妻・ママ・妻・ママ…と、全ママ連にとっては毎日がお祭りでしたなぁ…。これからもよろしく。今度お礼に「パンツ」買ってあげます。見たことも履いたこともないんですよね？

『影　光』のレビューを頂いた我林さん。こちらからの要望にも細かく応じてもらいました。『影　光』はまだ 1 巻しか読んでいないのですが、我林さんのレビューのせいで 2 巻以降も読みたくなって仕方ありません。まさか自分の同人誌で、興味を持つような作品を紹介されるとは…

ゲストページを描いて頂いた千里きりんさん。とにかく私の不手際でご迷惑ばかりおかけしました。本当は大きな企画もあったのですが…。それはいずれ日の目を見ることにもなるでしょう。姉祭り(http://anedaisuki.kko.jp/2006/)のトップ絵もありがとうございました。お仕事の方でもますますご活躍の予感。千里さんの絵の載った本誌や姉祭りは、将来プレミア物に！？

全姉連会報 第 6 号

発　行： 全姉連 総本部

発行日： 2006 年 12 月 31 日

著　者： 全姉連総裁

連絡先： so-sai@zenaneren.org

全姉連総本部 http://www.zenaneren.org/
(mobile : http://www.zenaneren.org/a.cgi)

本書発行に至るまで、全姉連を通じて多くの同志から姉ゲー情報を頂きました。ここにお礼申し上げます。

No Elder Sister,

No Life.

全姉連 総本部

-the world's largest organization of elder sister geeks

www.zenaneren.org